

古里の景色を、何百年も先の未来に残したい

日本画家として、自然と人が織り成す風景を描き続けている前原さん。第104回秋の日本美術院展覧会(院展)では、初の文部科学大臣賞を受賞。各地で個展を開くなど、高い評価を得ています。

【岩絵具との出会い】

日本画を描くために主に使われているのは、鉱石を砕いて粉末状にした「岩絵具」。膠と混ぜて使い、数千種類もの色彩を繊細に表現します。前原さんは、この岩絵具の美しさに惹かれ、日本画を描き始めたといいます。

「もともと絵を描くのが好きで、偶然見かけた岩絵具の色に魅せられました。そのまま塗っても奇麗ですが、混ぜたり、重ねて塗ったり、火で炙ったりすると色が変わり、奥行きのある色彩が表現できます。岩絵具や金箔などの画材の研究には、終わりがありませんね」



【自然と人が生み出す温もり】
前原さんの絵のほとんどは、草花や樹木などが主役。そこに、光や水、人が作り出す空気感を描き、自然の美しさを表現しています。

「自然が好きで、植物やその



日本画家 日本美術院同人
前原満夫さん(旭一丁目)

感じられるように描いています。取材は、市内から全国各地まで、どこへでも赴きます」

その丁寧な描写力と豊かな表現力が高く評価され、院展で多数受賞。2度の日本美術院賞受賞を経て、平成28年に

周囲の景色をじっくり観察して写生しています。すると、人の足跡があつたり、梅に添え木があつたりして、その土地の人の温かさを感じますね。絵に人物が登場しなくても、人の気配や優しさが

は、日本美術院同人に推挙されました。同人とは、日本美術院における画家の序列の最高位で、現在38人が在籍。岡倉天心や横山大観など、日本美術史を代表する画家を数多く輩出しています。

【未来に伝えたい景色】

前原さんは、絵を描く前に観察とスケッチを何度も繰り返し、その先に見えるものが大事だといいます。

「伊久美や川根には、近くに住んでいてもなかなか気付かないような、素晴らしい景色がたくさんあります。スケッチしていると、最初は気付かなかった植物の生命力の強さ、人の優しさが、次第に見えてきます。それを発見したときの感動を、日本画で皆さんに伝えたいですね」

自然の生命力を表現してきた前原さんですが、今まで描いていない古里の歴史や風景を描く構想もあるそうです。

「四季を織り交ぜた大井川の景色や、江戸時代の宿場町を思い起こすような絵を描いてみたいですね。自然と歴史に恵まれたまちの魅力を、絵でたくさんの人に伝えていきたい。将来、時代を越えて残してもらえような絵を描くのが、私の夢です」

前原さんのためまぬ努力と観察眼、丁寧な描写によって描かれた景色は、未来の人々にも伝えられていきます。



れんし
「蓮糸」
第104回秋の院展
文部科学大臣賞受賞作
(展覧会終了後、島根県足立美術館に収蔵)

Shimadajin File #99

島田
Story 人